今年もキネマ旬報、ベスト・テン表彰式に

上原 昇（２組）

昨年に引き続き今年もキネマ旬報、ベスト・テン表彰式に行ってきました。
1919（大正８）年創刊の歴史が一番古い映画雑誌「キネマ旬報」は、今は月刊となっていますが、以前は月に２回発行されていたので旬報と称しています。
今年で 98 回目を迎えるベスト・テンの表彰式は、２月 20 日（木）の夜、渋谷のオーチャードホールで開催されました。
同ベスト・テン作品は日本映画 60 名、外国映画 61 名の評者により、2024 年に公開された映画の中から選ばれるもので、その歴史や評者のレベルの高さから一番権威があるとされています。昔から映画好きな筆者ですが、最近は齢もあり、映画館で観る映画の数も限られてきました。それでも自分が観た映画がその年のベスト・テンの何位になったのか興味があり、毎年２月発行のキネマ旬報ベスト・テン特集号を買い求めています。

特集号表紙を飾る主演賞の二人

主な受賞は以下の通りですが、日本映画のベスト１は私の評価と同じ、外国映画ベスト１は観ていません。

◆日本映画ベスト１　『夜明けのすべて』（三宅唱監督）・・２位以下を大きく離して受賞
◆外国映画ベスト１　『オッペンハイマー』（C.ノーラン監督）・・アカデミー作品賞
◆主演女優賞　河合優実（『ナミビアの砂漠』、『あんのこと』により）
◆主演男優賞　松村北斗（『夜明けのすべて』により）
◆助演女優賞　忍足（おしだり）亜希子（『ぼくが生きてる、ふたつの世界』により）
◆助演男優賞　池松壮亮（『ぼくのお日さま』ほかにより）
◆日本映画監督賞　三宅唱（『夜明けのすべて』により）
◆外国映画監督賞　クリストファー・ノーラン（『オッペンハイマー』により）

今回の主演賞には 25 歳の河合と 30 歳の松村という若手の俳優が選ばれ、二人のこれからのますますの活躍が期待されます。
日本映画監督賞の三宅唱（41 歳）は 22 年にも『ケイコ目を澄ませて』でベスト１を獲得しており、その演出力に対する評価は高いものがあります。
特集号をめくっていると、Ｙという映画評論家（雑誌には名前が表記されていますがあえて Y）が 2024 年日本映画を総評しています。その中で、「『ナミビアの砂漠』（2 位）と

『あんのこと』（10 位）には作り手の語り（態度）が見えない。この二作品がベスト・テンに選出されていることに、私自身はいささかの衝撃を感じずにはいられない」と否定的に述べています。河合優実が主役を演じている両作品は観る人の世代や価値観で評価が大きく分かれるのだと思います。
表彰式当日は寒い日にもかかわらず、大勢の映画ファンが参加して大盛況となりました。こうした表彰式の楽しみは、鑑賞した映画に登場した俳優を実際に見て、そのスピーチが聞けることです。
主演女優賞の河合は若いですが、2021 年には新人女優賞を授賞している実力派俳優です。
スレンダーな身体に黒のロングドレスをまとって登壇して、「二つの作品にもらった勇気を胸に、これからも諦めずに光を探していきたい」と想いを語っていました。画像は　キネマ旬報　98 回　ベスト・テン表彰式 河合優実 - 検索 画像　参照。
白の艶やかな和服姿で登壇した助演女優賞の忍足は、耳の聞こえない俳優として手話でのスピーチとなりました。聾者の受賞は初めてのことだそうで、会場の我々も事前のリハーサルもあり、手話で拍手を送りました。画像は　キネマ旬報　98 回　ベスト・テン表彰式 忍足亜希子 - 検索 画像　参照。
2025 年も興味ある映画が目白押しで、どんな映画がベスト・テン入りするか楽しみにしながら、映画鑑賞をしたいと思います。

（2025 年 2 月 21 日記）

以上